あるびでえ

No. 8

世田谷区教育委員会　民家園係
〒157-0067　世田谷区喜多見5-27-14
◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492
◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959

平成２年３月１日　発行
平成12年６月　増刷

旧秋山家住宅土蔵

―区指定有形文化財第12号―

○文化財指定年月日
　昭和56年７月22日
○旧所在地
　世田谷区深沢６－10
○復元場所
　区立次大夫堀公園民家園内
○復元完了
　平成元年10月竣工
○規　模
　桁行　３間(5.45m)
　梁行　２間(3.64m)
　総高　8.77m
○延床面積
　11.5坪(38.0㎡)
　［１階：６坪、２階：5.5坪］

←写真 1　旧秋山家住宅土蔵・正面

旧秋山家住宅土蔵があった世田谷区深沢の地は、区の東南に位置します。深沢は、江戸時代、天領（幕府直轄地）で、南部の呑川沿いに帯のような奥深い沢(谷)地が広がっていました。『深沢』の名もこのことから起こったと言われています。

秋山家の家歴については、あまり明らかになっていませんが、深沢村の旧家の一つで、元和から寛永年間（1615～1643）に烏山の秋山喜兵衛家から分家し、当地に移ったとされています。屋号を『油屋』と称していますが、これは、十代目『紋兵衛』が幕末期（慶応年間頃）より質屋・油屋を始めたことによるものです。

秋山家屋敷内には、穀倉や油倉、質倉など、数棟の土蔵が建っていましたが、今回復元された土蔵もその内の一棟で、穀倉として使われていたものでした。土蔵は、家財や穀物など、貴重な物を格納するための建物で、その主たる目的は、火災や盗難からこれらを守るためのものでした。そのため、構造も土蔵造りでできており、火災に強い造りとなっていました。

この蔵は、昭和56年に解体保管されまし

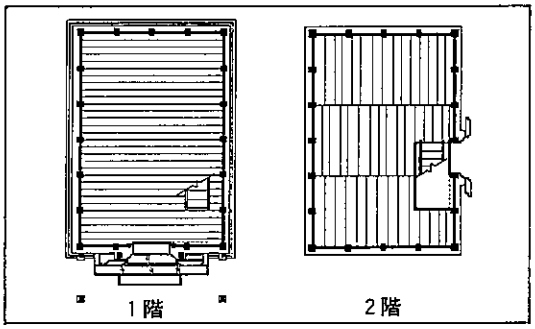
Photo by Yonehata Katsuyuki

たが、その際にはトタン葺の屋根で、壁もトタンで覆われていました。しかし、この時の解体調査により、置屋根の登り梁に扠首尻を受ける穴の跡が発見されたことから、当初は茅葺と推定されました。また、トタン壁の下からは漆喰が発見され、以前は漆喰塗の外壁であったことも判りました。

一方、この蔵の建築年代についてですが、内部一階の柱に打ち付けられていた祈禱札に、文政十三年(1830)の墨書銘があったことから、江戸時代後期同年代頃に建てられたものと推定されています。

↑写真 2　一階内部

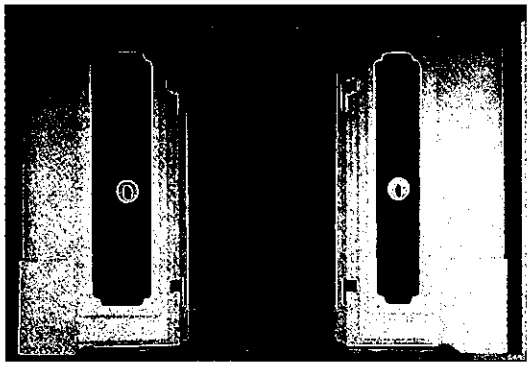
今回の復元工事は、解体調査によって判明したことを基に、旧材を可能な限り用いて進められました。その工事内容は、基礎工事、木工事、左官工事、屋根工事の四つに分けることができます。基礎は、地盤が軟弱なことから現代工法を取り入れ、地中梁の上に切石の布基礎を廻しています。木工事は、旧状で使われていた柱や梁を利用するため、根継ぎ等を施して修理し、建てられました。左官は、昔の土蔵造りの技法により、漆喰塗(上塗)まで施されています。屋根は、建築当初の置屋根、茅葺で復元されました。そして、これらの工事のうち、最も手数を要したのが左官工事でした。 左官工事は、木舞掻きから始まり、下塗→中塗→上塗の壁塗り工程を経て仕上がっていきますが、この壁塗りは、荒打ちと呼ばれる下塗から漆喰による上塗



↑図 1　旧秋山家住宅土蔵・平面図

まで、十数回も繰り返されます。そして、その厚さは約28cmにも及びます。

なかでも出入口や窓の扱いは特に重要視されていましたが、それは、ここを閉じた時にできる僅かな隙間から、火が入らないような工夫と、それを施工する入念な技術が要求されたからです。ここに見られる観音扉［写真３］の召合せも、火の手が内部へ入りにくくされた工夫の一つでしょう。



↑写真 3　観音扉

また、こうした箇所にできる隙間を埋めるために、『用心土』と呼ばれる粘土が、扉近くに常時用意されていたという例も各地で見られました。これは世田谷区内においても報告されています。

昔はこうした土蔵ができ上がるまでに、２～３年もの歳月が掛かりました。この旧秋山家住宅土蔵も、近年失われつつある昔ながらの伝統技法によって行われたことから、２年７カ月を要し、ほぼ建築当初の形で甦らせることができました。

区文化財資料調査員　高　橋　　誠

＊壁塗り工程は、園内の『土蔵壁塗見本』をご参照ください。